

《一般部門・最優秀賞》 『もう森へは行かない』

あらすじ

時は平安。疫病や飢饉で荒んだ京で悪事を繰り返すイチ。仲間に裏切られ、捕らわれる身となるが、空也上人に救われる―非道を極めた若者が、人々との出会いの中で、迷い、葛藤しながら人間らしさを取り戻していく。

作品の一部抜粋

月あかりで刃がぬれたように鈍く光っている。刀が泣いとる、とオレは思い、背中がゾクリとなった。ヤマの野郎も切先に細い目を寄せて、

「俺の見込んだ通りの、ええ刀や」と、狙った女でも見つけたように小さく舌なめずりをする。

「おおい、こいつ、まだ生きとるで」クマが向こうで頓狂な声をあげた。その名の通り毛むくじゃらの大きな野郎で、オレよりも年下のクセに、おっさんのような野太い声をしている。

「アホ、声がでかい。サッサと始末せえ」ヤマが声を殺して言う。

オレがクマのほうを見た時には、立て膝をついたあいつが刀子を逆手に持ち、倒れた男の胸に二度三度と刃を突き立てていた。その濃い影が動くたびに、男のうめき声だか肉が切り裂かれる音だかわからないような音がきこえ、たちまちあたりに血のおいがたちこめる。

「おい、人が来んうちにはよ行くで」血のおいが苦手なオレは刀を鞘に収めて提げ、歩き出した。

ヤマも並んで歩き、後ろからクマもついて来る。オレたちは裸足だが、それは足音でできるだけたてないようにするためだ。足の裏は草鞋ほどに固く、真冬になろうがしもやけにもあかぎれにもなりはしない。そもそもそんなヤワな体でこのクソみたいな世の中を渡ってはいけないのだ。

桜が散ったばかりだというのに、もう夏みたいに暑い日が続いていた。なまぬるい夜風の中に、葉っぱの青臭さを嗅いだ。このところ雨が一滴も降らないので、どこもかしこも乾き切っている。

「ほんまにこの刀が家に化けるんか？」クマがオレとヤマの間に顔を突っ込むようにして訊いてくる。昼間にクマがかじっていたニンニク臭さが鼻をつく。ヤマは顔をしかめてクマの頭をグイと後ろへと押しやって、

「ほんまや。これだけの刀はめったにお目にかかれるもんやない。家の二軒や三軒分の値打ちがあるのは間違いない」と得意気に言う。

ヤマは不思議な男だった。なんでそんなことまで知ってるのやということまで知っていて、押し込みのやり方や逃げる方向なんかを狂いなく教えてくれる。きつねのような長い顔をして痩せて女のような優しい声をしているが、やたらと人を殺めて楽しむところがあった。それはそれでオレにしてみれば、別に何ということもなかったが、血のおいだけはかなわないと思うだけだった。

今日、刀を奪い取ることを言い出したのもヤマだった。東の市をブラブラ歩いている時に、キラキラと光る、漆に銀をあしらった鞘と柄の刀を挿した役人らしい男を目敏く見つけた。後をつけて家をつきとめ、夜に出歩くところを待って襲い、奪おうという策を立てたのだが、ツイていた。というのもさっそくその晩、男は家を出て妾宅と思える家でメシを食い、ひどく酔った足取りで出て来たのだった。こうなればオレたち三人の力をあわせるまでもなく、クマ一人で事足りた。刀子で背中をひと突きして、あっさり刀を奪った。そしてとどめを刺して殺したというだけの話だった。いつもの押し込みよりも百倍楽で、百倍もうかるなんて、だからオレたちは悪事がやめられないのだ。

作者プロフィール

松下 隆一（まつした りゅういち）

1964年、兵庫県生まれ。京都市在住。

脚本家／作家。日本シナリオ作家協会会員。

KYOTO 映画塾卒業。

『二人ノ世界』のシナリオで第10回日本シナリオ大賞佳作入選。第9回テレビ朝日シナリオ大賞最終選考候補。

主な作品に、小説『二人ノ世界』（河出書房新社）、ノンフィクション『異端児』（PHP 研究所）他。脚本作品に、映画『獄に咲く花』『氷川丸ものがたり』／ドラマ『天才脚本家 梶原金八』『雲霧仁左衛門3・4・5』他。映画、ドラマ、舞台などのシナリオ執筆多数。



受賞のコメント

京都文学賞の存在を知ったのは昨年七月の終わり、第一回という文言に惹かれ、受賞作はひと月ほどで一氣に書きあげました。

本業は脚本家ですが、創作態度については『羅生門』『雨月物語』といった世界的名作映画を生み出した、大映京都撮影所出身のカツドウヤの方々から大きな影響を受けました。それは一言で申せば“本物を追求する” “人間を描く” といった、今どき流行らない、面倒くさいことなのですが、小説においてもその初志を貫き、受賞できましたことは望外の喜びでもあります。

最後になりますが、実行委員会の方々、選考に携わって頂いた方々、これまで私を支えてくださったすべての方々にお礼を申し上げます。

ありがとうございました。

あらすじ

祖母ゑいが大事に保管していたのは一冊の古いアルバムと一本の映画フィルムだった。孫の哲郎は亡き祖父良一が撮った映画を修復して、ゑいに見せてあげたいと願う——映画の町・太秦に生きた夫婦の姿を過去と現代を交えながら綴る感動の物語。

作品の一部抜粋

哲郎は植え込みの間を抜けて玄関の前に立った。戸はドアではなく上半分に硝子のはまった引き戸だ。周囲にはブザーとかチャイムとか来訪を知らせる装置は何もなさそうである。

「こんにちは。ごめんください」

硝子戸越しに声をかけてみたが、まるで反応がなかった。戸に手をかけてみると鍵が掛かっている。留守なのか昼寝でもしているのか、家の中はひっそりとしていた。

「すいません。あの・・・山村さん？ 山村さん？」

哲郎は軽く戸を叩きながら呼びかけてみたが、何度繰り返しても結果は同じだった。どうやら無駄足だったようだ。哲郎は舌打ちして戸の前を離れた。出直すしかない諦めて玄関に背を向けたとたん、後頭部に激しい痛みを感じた。

「アイタツ！」

哲郎は思わず声を出して叫んだ。痛いところを手でおさえて左右を見回してみたが、誰の姿もなかった。何が何だかよくわからない。ふと見ると地面に白いボールが転がっている。一体どこから飛んできたのか。不思議に思っていると、第二弾が天から降ってきた。

「アイタツ！」

もう一度呻いて振り返ると、屋根に誰かがいた。うぐいす色のアツパツパを着てスリッパを履いている。右手にボール、左手にバケツを持った老婆がすくつと仁王立ちして哲郎を見下ろしていた。

「お前、誰や」

「俺は・・・あの・・・」

「空き巣か」

「いえ」

「押し売りか」

「いえ」

「ほなら何もんや」

「俺は・・・東京にいる孫です。おばあさんの娘の子供」

「フフフ。騙されんぞ」

「は？」

「オレオレ詐欺やろ！」

老婆は叫ぶと同時にバケツの水を浴びせてきた。哲郎は頭からまともに水をかぶってびしょ濡れになり「ひえ〜」と悲鳴を上げて後ずさりした。この婆さん、ホントに八十九？ だとしたら老人なんかじゃなくて怪物だ。まさしくエイそのものだと思った。

作者プロフィール

藤田 芳康（ふじた よしやす）

1957年、大阪市生まれ。東京都在住。

1981年、神戸大学文学部卒業後サントリー制作室にコピーライターとして入社し、京番茶のCMなどを演出。

1998年、脚本『ピーピー兄弟』でサンダンス/NHK国際映像作家賞を受賞。

2002年、同名映画を自ら製作・監督する。

日本映画監督協会及び日本シナリオ作家協会会員。



受賞のコメント

京都とは不思議と縁があります。初めて演出したお茶のCMもこの町が舞台でしたし、それがきっかけで日本映画発祥の地と呼ばれる太秦に撮影で何度も通うようになりました。そして、その仕事で出会った仲間たちと念願の映画づくりに挑んだのが二十世紀最後の年。それから二十年、監督第二作の企画がなかなか映画にならなくて苦しみましたが、そのシナリオを小説という別の形で大きく生まれ変わらせた『太秦―恋がたき』がうれしいことにこんなに素晴らしい賞に輝いてくれました。初めての新しい第一歩は、いつも京都から。大阪で生まれて東京で働いて京都に育ててもらっているかのように、ただただ感謝の念に堪えません。本当にありがとうございます。

あらすじ

コミュニケーションが苦手な少年、月乃。月乃はある日、マスクをつけた女性、雪乃に出会い、心惹かれていく―未来の京都を舞台に少年と謎めいたマスクの女性が紡ぐ心温まる物語。

作品の一部抜粋

五月九日 木曜日 残り七十六日

女と白衣を着た男が話している。

「さて、準備は整ったかい？」

「はい」

「詳しいことは前に説明した通りだ。何か行く前に聞いておきたいことは？」

「何もありません」

「そうか、わかった。結果報告のために呼び寄せることがあるかもしれないが、その時はまた連絡する」

「はい」

「期限の日には、必ず帰って来るように」

「はい」

「それじゃあ、良い結果を期待しているからね。行ってらっしゃい」

「はい、行ってきます」

ガチャ バタン

五月十日 金曜日 残り七十五日

やばい、眠すぎる。昨日、早く寝ておけば良かった…！しかも、暖かいから、尚更眠くなる。

僕は京都市内を走っている市バスのバス停でとても後悔した。

僕の名前は冬田月乃。「月乃」って物凄く女子みたいな名前だなと思う。高校一年生で帰宅部だ。ちなみに僕は、ここ京都で生まれ、育った生粋の京都人だ。人とコミュニケーションをとるのは苦手。学校でも、友達といえる人は片手で数えられるぐらいしかない。

僕は学校の終学活が終わると、余程のことが無い限り、図書室に行き、本を読んでいく。そして、四時半に図書室を出て、帰路に就く。

帰り道は高校の近くにある市バスのバス停からバスに乗り、家の近くのバス停で降りて、少し歩く。その間およそ二十五分。

ようやくバスが来た。僕はバスに乗ると、座れる席を探した。眠いから寝ようと思つて。ほとんどの席が埋まっていた。ただ一席を除いて。その席は運転席側の後ろから二番目の二人席の通路側。僕はあまり誰かの隣に座るのは好きじゃない。けど今回は仕方ない。だから僕はその席に座った。

隣の席の人は栗色のつやつやとした長い髪を一つに束ね、つぶらな瞳を持つ顔。顔の下半分はマスクで隠れているが、可愛いらしい雰囲気がある。

今は隣の人を観察している場合ではない。その席に座った瞬間から睡魔が僕を襲う。もちろん僕は睡魔と戦ったが、打ち勝てるわけもなく、僕は夢の中に引きずり込まれた。

作者プロフィール

阪野 媛理（さかの ひめり）

京都市在住。

京都市立御池中学校7年。



受賞のコメント

この度は京都文学賞 中高生部門 最優秀賞をいただき、誠にありがとうございます。
ます。

私が初めて書き上げた作品で、このような賞をいただくとは思っていなかったの
で、ただただ驚くと共にとても嬉しく思っています。

書き進めていくにつれ、これからの京都はどうなるのだろうとふと思いました。

この先の京都がどうなるか分かりませんが、そう遠くない未来にこの作品のような
ことがあっても良いのではないかと思いました。

最後に本作品の執筆等際しまして、お世話になった皆様に深く感謝を申し上げます。
ます。

あらすじ

ずっと檜屋しか知らなかった「僕」に外の世界を、いろんな感情を教えてくれたのは海援隊の人たちだった―激動の幕末、龍馬とその仲間たちの活躍を見守り続けた「僕」の物語。

作品の一部抜粋

十月十三日。才谷さんはこの檜屋から近江屋に移る、と隊士に告げた。大政奉還、せっかくならここで迎えて欲しかった。皆が狂喜乱舞しているところを見たかったのに。

「お別れじゃのう、檜屋とも」

ほとんどの隊士が出払った後、仰向けになって言う。この人は、天井に向かって喋るのが気に入ったのかな。ねえ才谷さん。そんな悲しいこと言わないでよ。海援隊京都詰所がここだってことが、僕の唯一の心の支えなんだから。だからお別れなんて言わないで。

「おまんは偉いのう」

唐突過ぎて何が言いたいのか分からない。

「誰にも気づかれなくても、この家を守り支えちよる。その身一つで」

誰に話しかけているの？ もしかして……。

「おまん、ずっとこの檜屋を見守って来たんじゃろう。今まで話しかけられたことはなかるうが。海援隊の皆は、少なくともわしはおまんの苦勞を分かちゅう。わしなんか……」

どつくん、と心の臓が跳ねる。この鼓動、絶対に才谷さんに聞こえているって。

「わしなんか、家の為に何もしとらんぜよ。国のことしか考えとらんかった親不孝者じや。昔から迷惑ばかりかけて。わしはおまんを見習いたい、棟木さんよ」

……なんだ。遂に話かけてもらえたと思ったら人違いか。才谷さんにも、僕は視界に入らないの？ 入っていても気が付いてもらえないの？ 僕も皆と同じで笑ったり、喜んだりするってのに。何でなんだよ。

そうだ。僕は何も偉くなんか無い。檜屋を支えているなんて、胸を張っては言えないんだ。なのに、一瞬でも自分のことかと思っただけで喜ぶなんて。でも何で僕じゃなくて棟木さんたちなの？ 君は立派だって、見習いたいって、才谷さんみたいな人に僕も褒められたいよ。これが、嫉妬ってやつか。

確かに僕は海援隊の為に特に何かをしてあげたわけじゃない。でも、真っ直ぐに僕を見つめて話してくれる人が一人くらい居たって、罰は当たらないでしょ。これだけ恋い焦がれるように待っているんだから。今までこの檜屋に来た人たちの中で、海援隊は一風変わっているから期待していたのに。

ああ、もう嫌だ。こうやって一生誰にも気が付かれずに、寂しい思いをして朽ち果てて行くのかな、僕は。所詮そんなものか。

作者プロフィール

高野 知宙（たかの ちひろ）

神奈川県在住。

渋谷教育学園渋谷中学校3年。



受賞のコメント

私はこの作品を通して、幕末の英雄として知られる坂本龍馬を陰で支えた人々がいたことを多くの人に知ってほしいと願っていました。史実から垣間見える彼らの姿を人間らしく、時代の壁を感じさせないように書くことを心がけ、私の愛を注いで出来た物語です。それを優秀賞に選んでいただけたことはこの上ない幸せですし、私の願いが叶ったような気がします。ありがとうございます。

あらすじ

高校生の娘・二藍と二人で暮らしている父・ひかる。彼には娘に打ち明けられない秘密があった。「僕は二藍に「お父さん」とよばれる資格はあるのか？」―源氏物語を背景に、現代の一つの家族の形を描く意欲作。

作品の一部抜粋

一

「いつてらっしやい!!」
相変わらず元氣いっぱいな声だった。耳にした清水二藍は急に振り返り、二階のベランダから身を乗り出してきて口を大きく開いている人の方に向かわせる視線に、いつもどおりに腹立ちの気持ち注ぎ込んだ。
家の前の道で今人影が見えないとしても、二藍は気まずさを心の中から追い出すことができない。

「いいよ、もういいって…」不快の気分を父の方に届けようとし、両手を懸命に振っている二藍は思わず唇の隙間から心の声を小さく漏らしてしまった。
「なーに。聞こえない」腹をベランダの手すりに密着させた父はすっかり傍観者をひやひやさせるほどの前のめりになってしまった。
しかし、二藍は見慣れた。軽い足取りで清水ひかるを後ろに残していった二藍は、父は未だに世間一般的な父の振舞い方を完全に把握できていないと、改めてつくづくと思っている。

向かい側のマンションに住んでいる葵あおいにとって、さっき目にした光景は日常茶飯事だった。
窓側に寄りかかっていたせいでやや赤くなってきている肘を揉みながら、葵はキッチンに入り、焼きたての食パンを口に入れた。

この時、リビングの壁に掛けてある時計の分針はちょうど「6」を指している。

おっとっと、二藍の後ろ姿が見えなくなってから、ひかるはようやく乗り出した体をベランダの中に回収した。ベランダの格子越しにリビングにある時計を見て、彼はいきなり何かを思い出したかのようで、冷めたバターロールを口に放り込み、慌てて家を飛び出していった。
ドアが外の光を家の中から追い出すやいなや、時計は「ティーン」と音を鳴らし、七時半を告知した。

作者プロフィール

翁 筱青（おう しょうせい）

1994年生まれ。中国国籍。

長野県在住。

東北大学文学研究科文化科学専攻国文学
専攻分野博士前期課程 修了見込み。



コメント

この度は、海外部門奨励作として
ご選出いただき誠にありがとうございます
입니다。 選考委員の皆様へ感謝いた
します。 拙作は惚れている王朝物語
世界を現代に蘇らせてみたもので
す。 浅学非才の身としては、華のあ
る物語を紡げず、大変恐縮です。 今
回の奨励を励みに、今後とも物語を
通して京都への理解を深めていきたく
と思います。

あらすじ

恋人と別れ京都に戻った龍之介。鴨川で出会ったハリーやアルバイト先の仲間との楽しい日々のさなか、祇園祭で舞を奉納する謎の少女に心奪われた。その時、一匹の猫が現れて―交差する恋心が織りなす切ないファンタジー。

作品の一部抜粋

「もう、うちの負けやわ」

曲もない。
舞台もない。

でも、彼女は袖を翻して静かに舞い始めた。

その姿はあまりにも美しく、

だんだん月に雲がかかってゆくとともに彼女の姿が薄れてゆく。

キラキラと火花のような光が彼女の体から空へと飛んで行く。

消えかけた梅美和は、一瞬優しく微笑んだ気がした。

サー。

風が吹き抜ける。

鴨川にはもう、月は写っていない。

ただただゆったりと流れてゆく。

目の前にはもう誰もいない。

ひよっとしたら、元から誰もいなかったのかもしれない。

それでも、僕は梅美和を、たった一人を百年以上もの間、ずっと愛していた。

冷たい地面に崩れ落ちた僕は、そっと空を見上げる。

雲が過ぎて、月がまた姿を現したとき、まるで空が川になったかのように視界が揺らいだ。

頬を伝う涙は、最後に彼女の吹かせた風のように暖かった。

また、一人つきり。

それなのに、毎年毎年彼女の踊った後みんなの記憶を消すだけの役目を果たす時とは

違って、寂しくなかった。

僕はポケットから、八坂神社で並んで写真を撮ったデジタルカメラを取り出した。

電源をつけると、画面には何人もの少女の中に一人、存在感のある美女が立っている。

いつもは冷ややかな表情を、今日は幼い少女のように崩して笑っている。

梅美和とは、毎年全員の記憶を消すように約束していた。

でも、今年だけは守らないことにする。

これは、人をだまくらかすのを得意とする化け猫の、ちょっとしたイタズラだ。

作者プロフィール

古賀ブラウズ オリビア水伽月

(こがぶらうず おりびあみかづき)

2004年生まれ。日本・イギリス国籍。

京都市在住。京都市立御池中学校9年。

2017年、第11回「12歳の文学賞」

小説部門 佳作。



コメント

主人公が本当は誰なのか、序盤では考えもしなかった疑問を唐突などんでん返して引き出す。自分に可能だと思っていなかった作風で奨励作として選ばれたことに限りない喜びと驚きを感じています。これから先、自分のボーダーを一步一步飛び越えながら英語と日本語、どちらも活かした作品を世に発信していきます。有り難うございました。